



267号
2021/10

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



実は造り物：美しいモミジの写真だが、撮影は3月。前年秋に取り付けられ、一冬街路樹を彩った紅葉を、作業員たちが、取り除いているところだ。元の木のポプラはこれから新芽を出し、自分の色で街並みを染めて行く。
(遼寧省瀋陽市 2016年3月 撮影 満柏)

‘わんりい’ 2021年10月号の目次は20ページにあります

春になり、2羽の燕が南から帰って来ました。彼らは一軒の農家の軒先の梁の上にやって来て、そこに快適な家を作りました。

まもなく、子燕が生まれて、一家は毎日楽しく忙しく生活していました。

ある日、彼らが目を覚ました時、その農家のいろり付近で火が発生しているのを見つけましたが、燕の父親は言いました：「下で火が起きているようだが、我々には関係がない。お前たちはもう少し寝ておいで、私は食べ物を探しに行ってくるから」お父さんツバメはそう言うと、虫を探しに外へ飛んでいきました。

火はだんだん大きくなり、梁の上のツバメの巣も燃えてしまい、子燕は皆焼け死んでしまいました。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味:危険な処にいるのに、安全だと思い込んでいること。安全だと思っても、用心を怠ってはいけないという教訓。

使い方:ここは景色がとても

良いが、実際は軒先のツバメの巣と同じで、足元が崩壊の危険を孕んでいる。

・>・>・>・>・>・>・

このお話は、^{くぞうし}《孔叢子》という漢代に孔子8世の孫・^{こうふ}孔鮒(字は子魚)が孔子とその子孫、弟子たちの言行を記録したものと伝えられる書物に出ています。しかしこの書物、現在伝わっているものは、内容が雑駁で、その文体から見て、後の時代に作成された偽書であるというのが通説です。南宋時代に活躍して、儒家中興の祖と尊敬される^{しゅき}朱熹は、後漢に成立したものであろうと述べています。

出典とされる書物も余りポピュラーなものではありませんが、この四字成語自体、取り上げられるのは

珍しいようです。私の手許に、掲載数がかなり多い子供向けの四字成語辞典が2冊あるのですが、そのどちらにも掲載されていませんでした。勿論、日本語の字典でも取り上げられていません。ネットでようやく見つけました。

燕が人家の軒先に巣を構えるのは、人間の傍にすることで、天敵から身を守ることが出来るからです。そんな安心に慣れきってしまって、野生の動物としては本能的に恐れる筈の火を見ても、その危険性を充分には理解せず、安心しきっている。そんな状況を

戒めたものです。我々に馴染み深い言葉で云えば「油断大敵」ですね。

ところで、この「油断大敵」という四字成語の出典はどこだと調べてみると、何と、この言葉は日本製の言葉だったのです。比叡山延暦寺の根本中堂には「不滅の法灯」があります。この灯は、開祖最澄が初めて建立し、後に根本中堂として再建された草堂に、本

尊として薬師瑠璃光如来を安置し、御前に燈明を掲げて以来、1200年以上一日も絶えることなく灯り続けているもので、この灯を守るために僧が毎日菜種油を追加しているのです。この油が途切れると法灯が消えてしまうので、「油断大敵」と言って戒め合っているのだそうです。ほかに出典を求める説もありますが、これが一番腑に落ちる説です。

小さい時、「油断大敵、火がぼうぼう(と燃える)」と言うのをよく聞いて、火の用心の標語かと思っていましたが、本当は「油断大敵、火が亡亡(法灯が消えてしまう)」と言う意味だったのだそうです。

今月の四字成語には、かなり驚ろかされました。



挿絵: 満柏画伯

さい こう
崔顥の『黄鶴楼』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

長江と漢江の合流地点の武漢市を見下ろす小高い山の頂上に、九層の豪壮な楼閣が立っています。これが現在の黄鶴楼です。観光スポットとして今では多くの見物客を集めていますが、かつては水辺に近く、今の武漢大橋のたもと付近にあり、今より小ぢんまりとした佇まいでした。その後何度も火災に遭い、再建されるごとに建物は有名になり巨大化していきましたが、最後の建物も火災に遭い、跡地だけが残されました。

1957年、武漢大橋建設の際、その跡地も取り払われ、現在の地に再建されたのは1985年のことでした。

武昌（今の武漢）の街は昔から、四方に通ずる水上交通の要衝で、特に唐代以降は各地に赴任する役人や旅人たちの出会いと別れの場所でもあり、ここから多くの詩が生まれ、その数七百数十首とも言われています。中でも有名なのは盛唐の詩人・崔顥の『黄鶴楼』です。

黄鶴楼の由来についてはさまざまな伝聞や記録がありますが、それらに共通するものといえば、昔仙人がここにやってきて当地の人々と交流した後、黄色い鶴に乗って天に飛び去ったというものです。

〔原詩〕

huáng hè lóu
黄 鶴 楼

cūi hào
崔 顥

xī rén yǐ chéng huáng hè qù
昔 人 已 乘 黄 鶴 去
cǐ dì kōng yú huáng hè lóu
此 地 空 余 黄 鶴 楼
huáng hè yí qù bú fù fǎn
黄 鶴 一 去 不 复 返
bái yún qiān zǎi kōng yōu yōu
白 云 千 载 空 悠 悠
qíng chuān lì lì hàn yáng shù
晴 川 历 历 汉 阳 树

fāng cǎo qī qī yīng wǔ zhōu
芳 草 萋 萋 鸚 鵒 洲
rì mù xiāng guān hé chù shì
日 暮 乡 関 何 处 是
yān bō jiāng shàng shǐ rén chóu
烟 波 江 上 使 人 愁

〔訓読〕

せきじんすで こうかく の き
昔 人 已 に 黄 鶴 に 乗 っ て 去 り
こ ち むな あま こうかくろう
此 の 地 空 し く 余 す 黄 鶴 楼
こうかくひと また かい
黄 鶴 一 た び 去 っ て 復 た 返 ら ず
はくうん せんざいむな ゆうゆう
白 雲 千 載 空 し く 悠 悠
せいせんれきれき かんよう じゅ
晴 川 歴 歴 た り 漢 楊 の 樹
ほう そうせいせい おう む しゅう
芳 草 萋 萋 た り 鸚 鵒 の 洲
にち ぼきょうかんいず ところ これ
日 暮 郷 関 何 れ の 処 か 是 なる
えん ば こうじょう
煙 波 江 上 人 を し て 愁 え し む

〔和訳〕

こうかく いにしえびと
黄 鶴 の 古 人 は 飛 び 去 り て
このこ こうかくろう
空 し く も 名 の み 遺 せ り 黄 鶴 楼
ゆ つい
去 り 逝 き て 黄 鶴 終 ぞ 返 ら ざ る
せんざい
千 載 に 天 空 遙 か 浮 か ぶ 白 雲
みなも は かんようじゅ
晴 天 の 水 面 に 映 ゆる 漢 陽 樹
しゅんそう お しげ おう む しゅう
春 草 の 生 い 繁 れ る や 鸚 鵒 洲
ゆうもや ふるさと
夕 靄 の 波 の 彼 方 に 故 郷 仰 ぎ
わ きた おの はて
湧 き 来 る 己 が 愁 い や 果 し 無 き

元代の文人・辛文房の『唐才子伝』によると、李白がこの黄鶴楼にやってきて詩を作ろうとしたとき、壁に書かれたこの詩がふと眼に留まり、感服のあまり何も書けず、帰ってしまったとか。たぶん後世の作り話と思われませんが、崔顥という詩人は只この一作によって、文字通り名を千載に残すことになりました。

王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」

報告: 寺西俊英

今回は、王昌齡の『芙蓉楼送辛漸』(芙蓉楼にて辛漸を送る)について解説頂きました。彼は皆さんご存知のように盛唐の詩人で、京兆(今の陝西省西安市)の人とされています(諸説あり)。生没年は700?~755?年となっており、これも諸説あるようです。字は少伯。就任した官職の地名から、王江寧、王竜標とも称せられています。江寧(今の南京)、竜標(今の湖南省懷化市)とも左遷の地です。彼の生涯は第7代玄宗皇帝の在位期間(712~756年)とほぼ重なり、李白や杜甫と同じ時代を生きています。

開元15年(727)に進士に及第後、校書郎から汜水(河南省)の尉(地方の軍事・警察等を司る役人)となりましたが節度をわきまえない言動から官僚社会になじまず、左遷されて各地を転々としています。そして755年に安祿山の乱が起こり、乱を避けて故郷に帰る途中、刺史の間丘暁に憎まれ殺されました。55年の生涯でした。

これからご紹介する詩もそうですが王昌齡の作風について、植田先生は「彼は流行歌の作詞家のようですね。作り方は上手だし、口調の良い詩が多いです。この詩も音の響きが良く、イメージが湧きやすいです。ただ詩の内容に李白や杜甫のような深みがないと言えますね」と言われ、さらに「おそらく唐の時代は李白や杜甫より有名だったかも知れません。妓女などは彼の詩を競って歌ったようですから」とも。李白は「詩仙」、杜甫は「詩聖」と言われていますが王昌齡は「七言絶句の聖人」と称され、辺塞詩や閨怨詩(女性の悩みや不満を訴える詩。多くは男性が我が身を女性に擬えて自身の不遇を訴える)に巧みでした。

それでは『芙蓉楼送辛漸』を見てみましょう。全文は次の通りです。

fú róng lóu sòng xīn jiàn
芙蓉楼送辛漸

wáng chāng líng
王昌齡

hán yǔ lián jiāng yè rù wú
寒雨连江夜入吴,
píng míng sòng kè chǔ shān gū
平明送客楚山孤。
luò yáng qīn yǒu rú xiāng wèn
洛阳亲友如相问。
yī piàn bīng xīn zài yù hú
一片冰心在玉壶。

まず、題名にある芙蓉楼は、辛漸の送別の宴を催したところですが、今の江蘇省の長江下流の都市・京口(今の鎮江)の街にありました。鎮江の対岸は鑑真で有名な揚州。古来渡し場が設けられ、水上交通の要衝として栄えました。『三国志』で知られる呉の国が一時期都を置いた土地でもありません。送別の宴を開いたとき王昌齡は、鎮江の西方、江寧に左遷され丞(県の副長官)となっていました。

●一句目

かん う こう つら よる ご
寒雨江に連なり夜呉に入る

〈冷たい雨が長江の水面に沿って降りそそぎ、夜にはその雨足が呉の地に入ってきました〉

この時作者は題名にあるように、洛陽に帰還する友人の辛漸のために芙蓉楼で送別の酒宴を開いていたのです。辛漸という人物の詳細はわかっていませんが、あるいは作者と同じように左遷の辛酸をなめた経験の持ち主だったかもしれません。だとすれば、それ故に共感する所も多かったものと思われまます。

また、この詩句の解釈には諸説があります。そ

の多くは「作者が辛漸を伴って呉の地に入ってきた」となっています。しかし植田先生は「夜になると、冷たい雨が長江の流れと共に呉の地にやって来たということです」と解説されました。また「〈入呉〉の主語を〈寒雨〉としたのは雨を擬人化した表現と言えます。そしてこの冷たい雨は、親しい友人との別れの辛さを暗示しています」とも。さらに加えて「当時、王昌齡の任地は江寧で、江寧は鎮江と同じく呉の地域ですから江寧から鎮江に移動するのを〈入呉〉と表現するのは不自然ではないか……」とも。最近の中国ではこのような解釈も多く見られるそうです。

●二句目

平明に客を送りて楚山孤なり

〈明け方に辛漸を送ったとき、後方を振り返ると、楚の山々が寂しそうに佇んでいる〉

平明は明け方のこと。夜通し飲んで気がついたら外はほんのりと明るくなってきたので、そこでようやく辛漸に別れを告げたのです。〈楚山孤なり〉は、楚の国の山々が寂しそうに見送っている。これにも作者自身の気持ちが投影されています。〈楚山〉を擬人化した表現と言えます」と植田先生。

また、〈楚山〉とは文字通り解釈すると楚の国の山々という意味です。もともと〈呉〉は今の江蘇省南部から浙江省北部あたり、〈楚〉は今の湖南省、湖北省あたりを指す地名でしたが、両者を併せて「呉楚」と呼ぶこともあります。いずれも中国南方の長江流域を総称する言葉です。「ここでいう〈楚山〉は都を遠く離れた左遷先の山々と解釈できません。つまり〈楚山孤なり〉とは、独り取り残される作者自身の孤独を暗示しているわけです」と植田先生。また「意味からだけ考えれば、ここは〈呉山孤なり〉でも良いのですが、敢て〈楚山〉としたのは音声上のバランス(平仄)を考えた上のことでしょう」とも。

●三句目

洛陽の親友如し相問わば

〈洛陽に行けば友人たちが自分の安否を問うでしょう。もしも訊かれたならば……〉

洛陽は作者が左遷される前にいたところで、付き合っていた友人が幾人もいるところです。おそらく友人たちは、日ごろの言動から、自分が左遷された地で鬱々としているのではないかと気遣っているだろう、と作者は思っていたのではないのでしょうか？

●四句目

一片の氷心玉壺に在り

〈私の心境はいつも冷静で落ち着いており、あたかも澄み切った一片の氷が玉の壺の中に納まっているようなものだ、(と答えて欲しい)〉

つまり「私のことは心配しないでほしい。左遷されても決してくさってなんかいないよ！」と、言外に強がりを言っているようにも思えます。また取りようによっては、洛陽に還って行く辛漸を羨む心を必死に抑えているようにも聞こえます。

この結句はとても印象的な一句ですが、実は南北朝時代(420～589年)、南朝宋(420～479年)の詩人・鮑照の楽府「白頭吟」の出だしの聯から採られたものだそうです。

直如朱丝繩

直きこと朱糸の繩の如く

清如玉壺冰

清きこと玉壺の氷の如

7月号の「薛涛」について紹介した中で、魚玄機という女性は薛涛と詩妓の双璧を成すと書いたが、今回はその魚玄機の登場である。魚は美女の誉れ高く詩文の才に恵まれたが、最後は自分の愛した男と奴婢の関係に嫉妬して奴婢を殺害した。すぐ捕らえられ26歳の若さで刑場の露と消えた女性である。

まず姓名について少し触れると——中国人の姓は一字が大半であるが、その姓に何故か動物の名前を使ったものが意外に多い。例えば馬さん、牛さん、羊さん、虎さん、鳥さんなど、まだまだある。そして魚さん。名前の玄機であるが、辞書には〈計り知れず奥の深い道理〉とある。親は娼家を経営していたが、この意味の通りとすれば、命名する時何か深い理由があったのであろうか？

彼女の生没年は諸説あり断定できないが、843年頃の生まれと参考資料に出ており、さすれば薛涛が亡くなって(831年)12年後に生まれたことになる。同じ時代と思えるが、薛涛は中唐の詩人に対し、魚玄機は晩唐の詩人と紹介されている。

それでは玄機の一生を辿ってみよう。魚玄機がある程度名前が知られているのは、森鷗外が「魚玄機」という題名の小説を書いたからではないだろうか。もっとも中央公論にこの小説を発表したのは大正4年(1915年)であり、百年以上経っているので知る人ぞ知る、ではあろう。鷗外はなぜ彼女のことを書こうとしたのか分からないが、読めば面白い小説であり、ときおり鷗外の脚色ぶりを紹介しながら話を進めて行きたい。まず小説の初めの部分に次のように彼女の美しさに付いて触れている箇所がある。

★「玄機は久しく美人をもって聞こえていた。趙瘦と云わんよりはむしろ楊肥というべき女であ

る」

★「玄機が長安人士の間に知られていたのは、ひとり美人として知られていたのみではない。この女は詩をよくした」

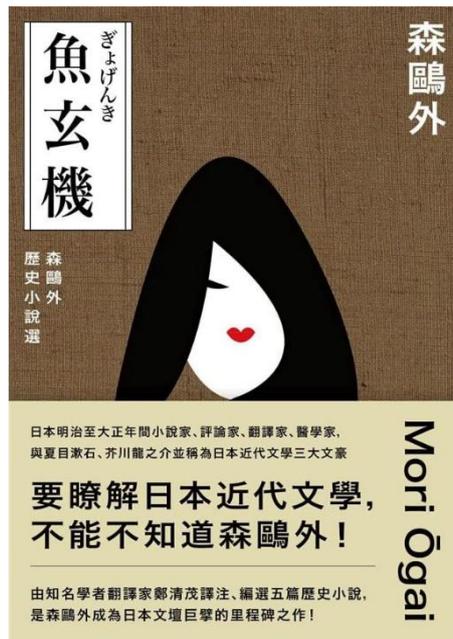
等と玄機を紹介しているが、これは小説家の創作である。鷗外の好みは、ほっそり型の趙飛燕よりぼつちり型の楊貴妃タイプなのかもしれない。〈三水小牒〉という書物には、「色既に国を傾け、思いすなわち神に入る。書を読み文をつくることを喜び〜」と書

かれてあり美女であったことは間違いなからう。生まれは長安市内の娼家である。何人もの妓女を抱えていて今でいう高級料亭などから依頼があればそこに派遣することを生業とした。彼女は小さなころから文筆の才があり一目置かれたようであるが、「小さい時から賢くて5歳の時にはすでに白居易の詩などの多くを暗記しており、13歳の時初めて七言絶句をつくり〜」とあるのも鷗外の創作であるが、さもありませんと思わせる。幼少の頃の魚に関する記録は残ってないようだが、詩作には目を見張る才能があったのは事実のようだ。

今後古文書が見つかって彼女の生きざまがより明らかになるよう願っている。

ところで彼女の人生に大きな影響を与えたのは、温庭筠(字は飛卿)である。晩唐の詩人、李商隠(812年~858年)と共に〈温李〉と言われた詩人である。彼はなぜか時の宰相であった令狐綯^{れいこうとう}の息子などの公子たちと一緒に遊び歩いていた。この辺りの温のひととなりを鷗外は、

「公子二人は美服しているのに、温はひとり汚れ垢ついた衣を着ていて〜 それから(温は)かつて聞いたことのない美しい詞を朗らかな声で歌うのに、その音調がよく整っていてしろう



中国語翻訳の「魚玄機」表紙(訳: 鄭清茂)

聯經出版公司(台湾),2019.

とは思われぬほどである。鍾馗の渾名のある于思盱目（髭が多く、目を大きく見張るさま）の温が、二人の白面郎に侮られるのを見て、嘲虐の目標にしていた妓らは、この時温の傍に一人寄り二人寄ってとうとう温を囲んで傾聴した」

と書いている。おそらくこのような光景であったと読者に思わせる。料亭でたびたび魚家から妓女を呼ぶうちに、玄機は彼の噂を知り、また温は妓女から玄機の話聞き、何かのきっかけで交流が始まったようだ。そして温は魚家に出向き玄機と対面した。そして玄機を見た温は、並みの少女ではないことを見抜き以降師弟関係になる。温に教えを受けたことは彼女の詩才を磨くうえで大きな力となったと言えよう。

魚玄機はやがて美しく成長した。と同時に美貌と詩名は長安の粹人や詩人に次第に広がって行った。そうした頃、彼女の娼家に熱心に通い始めた40歳余りの高級官僚がいた。それが李億で、温庭筠の友人であった。温から玄機のことを聞いたのであろう。李は玄機を一目見た時からその美しさの虜になってしまう。鷗外はこのように書いている。

「(玄機は)もう十八歳になっている。その容貌の美しさは温の初めて逢った時の比ではない。李もまた白晳の美丈夫である。李は切に請い、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎え入れた。～」

玄機も李のことを好きになり数年の甘い生活を過ごした。ところが20歳の頃、玄機にとっては青天の霹靂の事態に遭遇した。李が岳州に赴任することが決まりふたりで岳州に向かって旅行をした。岳州に着いた李は出掛けたまま玄機の下に帰らなかったのだ。玄機は李の心変わり理由が分からぬまま長安に戻らざるを得なくなってしまった。事実とすれば見下げた男である。あれだけ愛し合っていた李億の仕打ちに絶望した玄機は、長安城下にある咸誼観という道観に入り女道士となった。李億のこのような仕打ちが無ければ玄機は殺人を犯すようなことになっていなかったのではなからうか。

さて道観での生活であるが、道観の出入りは比較

的自由なので、美人の名に誘われて彼女の書求めに来る輩が多かった。その中に名は陳という、玄機より少し年下の美丈夫がいた。鷗外は「陳」という名前にしたが、李億と紛らわしいと思ったのであろうか、実名は「李近仁^{りきんじん}」と言う。お互いに琴線に触れたのか、そのうち足繫く玄機の所を尋ねるようになった。そのころ彼女は身の回りの世話をする老婢を一人雇った。口の固い媼で、従って二人の関係があまり世間に知られずに済んでいた。6～7年の月日が平穩に過ぎたが、ちょうど陳が旅行に行っている時にこの老婢は亡くなってしまった。葬儀を無事に終えた後、玄機は若い奴婢を雇うことにした。鷗外はこの若い奴婢のことを、

「そのあとに緑翹^{りよくぎょう}という十八歳の婢が来た。顔は美しくはないが、聡慧で媚態があった。」と描写し、その後の展開を暗示するように書いている。更には「緑翹は額の低い、頤^{おとが}の短い獮子(注＝犬・チンのこと)に似た顔で、手足は粗大である。」

とまで書いている。

ところが最初は玄機も陳もろくに奴婢を相手にしなかったが、次第に三人の関係が微妙に変化してきた。ついに玄機は二人の関係に猜疑心を持つに至ったのだ。そしてある出来事が起きて玄機は奴婢を自室に呼び問い詰めて行った。そのうちに怒りがふつふつと沸き起こり、自制がきかなくなった玄機は彼女の首に手をかけ殺害に至ったのである。鷗外のこの辺りの心の動きの描写は、心憎いまでに素晴らしい。「魚玄機」をご一読いただくしかない。天が二物を与えた詩妓の最後としてはなんともやりきれない。

さて逮捕された玄機に対し、彼女をよく知る人士は何とか救おうとしたが、京兆の尹(首府の行政長官)は第十八代皇帝・懿宗(在位859年～873年)に上奏し、ついに斬罪^{いそう}となった。26年の生涯であった。師弟関係にあった温庭筠は、長安から遠く離れた揚州の地におり、救済するための力も貸せず、深く心を痛めたという。

河南大豪雨

文＝村上直樹

筆者の都合から、『わんりい』誌の休刊月も含む2回ほど間隔があいてしまったが、この間、7月には河南省(中原)で大豪雨による深刻な水害が起こるといいう大変な出来事が発生してしまった。7月17日から鄭州、焦作、新郷、洛陽、南陽、平頂山、済源、安陽、鶴壁、許昌といった河南省の大部分の地域で歴史的な豪雨が続き、とりわけ20日夕方には省都・鄭州市内に未曾有の浸水被害をもたらした。

私も21日、日本の報道で知り、あわてて鄭州、開封、済源の住む何人かの知人にWeChatで安否を確認した。そのうち、鄭州の知人の1人は、目下、停電と断水が続いているとのことであったが、(この時点では)深刻な被害にあった人はいない模様で、少しホッとした次第である。その後数日は「抖音」(TikTok)やYouTube上も様々な情報・画像で溢れていた。ただし、それらは、かならずしも真偽が明らかではないので、以下、主にニュース報道を頼りに状況を整理してみた。

中国国内でも広く豪雨の影響が報道され始めたのは20日の鄭州における被害以降であると思われるが、地元の河南省ではすでに19日から警戒が高まっていたようである。右に掲げたのは2021年7月20日付の地元紙『大河報』の第1面である。大きく「聞汛而动」(増水と聞いて行動をとる)とあり、第3面にかけて7月16日以来の豪雨により、各地ですでに水害が発生しており、19日から22日にかけてさらに嚴重な警戒が必要なことを伝えている。河南省の役所で洪水と干ばつへの対応を担当する部署、「防汛抗旱指揮部」は19日の17時に特大な水害の危険が迫っているとして4段階で最高のIV級警戒情報を発出している。紙面の写真は、安陽、鄭州、信陽といった各地の被災・救援活動の状況である。

中央政府の対応を見ると、7月21日に災害救助に全力で当たるようにという習近平国家主席の指示が出され、翌22日にはそのことが『人民日報』の海外版でも一面トップで大きく報じられた。7月26日午前には、国務院の「国家防汛抗旱総指揮部」がオンライン会議を開催し、参加した李克強首相が、先の習主席の指示に基づいて、住民の生命財産の安全を最優先に具体的な災害復興活動を急ぐよう呼び掛けている(『人民日報』[海外版]2021年7月27日)。

さらに、8月2日になると国務院が災害復興に向けての専門組織として「河南鄭州『7.20』特大暴雨災害調査組」を立ち上げた。この調査グループでは被害に対する政治的責任の所在も追究するようである。調査グループの現地調査チームは8月20日に現地の鄭州において会議を開き、国務院の関係者、専門家、河南省の役所関係者、さらに各市および、鄭州市、鶴壁市、新郷市が所轄する県(県級市、区)の役所関係者もオンラインで参加した(『新華視点』2021年8月20日)。

一方、同じ時期の8月18日と19日には李克強首相が河南省の鶴壁、新郷、鄭州の復興状況を直接視察し、とくに鄭州では20日夜に水没状況に陥った地下鉄5号線の被災現場を訪れて、大都市建設における安全・防災面の保障の重要性を強調している(『鳳凰ネット』2021年8月20日)。

当然、これだけの大災害であるから、その復興には長期間を要する。8月9日に開かれた河南省の役所が主催した記者会見では、3か月以内にエネルギー、交通等の設備を復旧させ、正常な市民生活を取り戻すこと。1年以内に被災地における基本的な生活条件を災害前の状態に戻すこと。さらに今後2、3年をかけて、防災体制の一層の整備を図ること、が目標として掲げら



水害の状況を伝える7月20日付『大河報』

れた(『大河報』2021年8月10日)。

この記者会見では、8月9日7時現在での被害状況が明らかにされている。それによると被害は全省の150県(県級市、区)1664の郷鎮におよび、被災者は1481.4万人に上る。一割以上の減収が予想される被災農地面積(受災面積)は1620.3万ムー(約108万ヘクタール)、そのうち、収穫80%以上減が予想される「絶収面積」も513.7万ムーとされている。また、一部損壊を含む被災家屋は約30万戸であり、直接の経済損失は1337.15億元(約2兆2,730億円)と推定されている。

前述の「河南鄭州『7.20』特大暴雨災害調査組」の現地調査チームは、専用の電話、私書箱を用意して、9月30日まで一般からの情報提供を受け付けるので、今後は、より実態に即した被害状況が明らかにされるものと思われる。

この豪雨で実際どれくらいの雨が降ったのか、マスコミでは「千年一偶」(千年に一度)といった表現も用いられている。7月20日の16時から17時までの1時間に鄭州市の最も多いところで、201.9ミリメートルを記録しており、これは、中国大陸における1時間の雨量としては、1975年8月5日にやはり河南省の林庄(現在の駐馬店市駅城区板橋鎮林庄村に含まれる)で記録した198.5ミリメートルを抜いて過去最高となった。また、鄭州市二七区の雨量計によると当日24時間の雨量が696.9ミリメートルと、鄭州市の年間平均降水量を上回った(『中国ニュースネット』2021年7月21日ほか)。

河南省で発生した過去の甚大な水害というと、1938年6月9日の鄭州花園口における黄河の堤防決壊が思い当たるが、これは日本軍の侵攻を阻止するため、「以水代兵」として蒋介石率いる国民党が意図的に引き起こしたものである(いわゆる「花園口決堤事件」)。

今回の大豪雨を伝える報道の中では、河南省気象台副台長の蘇愛芳氏が1949年の新中国成立以来、河南省では5回の全省範囲の豪雨災害に見舞われてお

り、その中でも最大なのは「75.8」特大豪雨で、今回の豪雨はそれに匹敵する、といった意味のことを述べている。5回とは具体的にはいつ、どのような豪雨を指すのか、蘇副台長は具体的に示していないので、別途『河南省誌』(第27巻、水利誌)(1994年刊)で調べてみた。

まず、1954年が江淮(長江と淮河一帯)大洪水の年であって、とくに7月に雨量が集中したとある。次に1963年8月上旬には河南省の北部を中心に大豪雨による洪水に見舞われた。3番目に出ているのが1975年8月の豪雨である。前述のようにこの豪雨により、林庄で記録した1時間当たりの降水量の記録を今回の豪雨が上回った。なお、この「75.8」特大豪雨時に同じ林庄で記録した6時間の最大雨量830.1ミリメートルは当時の世界記録であった。『省誌』にあげられている4番目の大豪雨は改革開放後の1982年のことである。この時は台風の影響もあり、7月12日から8月24日にかけて連続4回の豪雨が発生したとある。

『省誌』には以上の4回しか出てない。これらが蘇副台長の言う5回のうちの4回に当たると考えられるが、5番目の豪雨はいつのことか。筆者が河南省について関心を持ち始めた2005年秋以降には起こっていないと思う。おそらく『省誌』が刊行された1990年代初めから2004年までの間のことであろう。

下に掲げたのは「75.8」特大豪雨に関連した一連の報道の中で、『人民日報』系列の地元紙、『河南日報』1975年8月29日の第1面である。トップ記事として中共河南省委(中国共産党河南省委員会)より8月27日付けで発出された「關於發動群眾大力開展生產救災的指示」(群眾を全力で生産による災害救助を展開するよう立ち上げらせることに関する指示)が載せられている。この「指示」の冒頭の記述から、とくに8月5日から8日にかけて駐馬店、許昌、周口、南陽、舞陽工区(現在は平頂山市の一部)等で甚大な被害が発生したことがわかる。



「75.8」特大豪雨を伝える1975年8月29日付『河南日報』

中国の面白い神話物語・伝奇物語(9)

顧傑

皆様、また一カ月たちました。

秋になって、中国にいる友人からは、携帯の SNS アプリでおいしそうなお料理の写真が送られてくるので、懐かしく感じ、食欲をそそられ、唾が止まらず本当に迷惑しています。

幸い日本の秋にも美味しいものがたくさんあるので、私も旬の味覚に舌鼓を打っています。

さて、前回の物語は如何でしたか？ 今回は、中秋の月にちなんで、唐伝奇の「昆仑奴伝」(崑崙奴伝)をご紹介しますと思います。

~~~~~

崑崙とは、現在の東南アジア諸国を指している。唐代には、海外貿易が盛んで、東南アジアからは、肌の色が浅黒い人々が奴隷として、アラビア人などと共に多く唐の都で働いていた。その頃は「崑崙奴(男性)、新羅婢(女性)」が最高のしもべとして、名士や高官の家に雇われることが多かった。そして、この話の主人公・崔という若者(以降、崔生と呼ぶ)の家もまた、一人の崑崙奴を雇っていた。

崔生は比類ない美貌の持ち主で、性格もとても真面目だった。声は鳥の鳴き声のようで、話の運び方も上手。父親はある程度名望のある役人で、崔生も宮廷で警備の仕事をしていた。

ある日、上司が病気になり、崔生は見舞いのために上司の家を訪れた。この高官は崔生のことが気に入っており、崔生が見舞いに来たのを喜び、四人の侍女(実質的な妾)に果物を持って来させた。

崔生は侍女たちを見て恥ずかしくて話もうまくできなかったが、赤い絹の着物を着た侍女が、果物を

スプーンに載せて口元に運んでくれたので、崔生はそれを食べた。

時が過ぎて、崔生が帰ろうと門のところまで来て、あの侍女のことが気になって後ろに振り向くと、彼女もまた崔生のことを、名残惜しそうに見送っていた。しかも高官に気づかれないように、三つの指を出して、手のひらを上下に三回返して、小さい丸い鏡を指した。

崔生は家に帰ってからあの侍女のことが忘れられず、彼女に恋してしまったことを自覚したが、相手は高官の女、手を出してしまったら首が飛んでしまう可能性だってある。それに彼女が示した手の動き、

あれはどういう意味なんだろうか。あれこれ考えて崔生はため息が止まらなくなってきた。

崔生の家には、「モラ」という崑崙奴がいる。モラは崔生のため息を聞いて、声をかけた：

「崔様、どうされましたか？」

崔生は赤い着物の侍女の謎についてモラに話すと、モラはさわやかな笑い声を立て、崔生に説明した：

「崔様、ご心配なく。この不肖モラが謎解きをいたしましょう。まず指三つ、というのは高官家には 10 軒の別荘がある

と聞いております。その方は 3 番目の別荘に住んでいらっしゃるのです。手のひらを三回返すのは、15 日(旧暦)を指しています。鏡を指しているのは、丸い月がある夜、つまり 15 日、明後日の夜に第 3 の別荘でお会いしたい、ということでしょう。」

崔生はそれを聞いて、一瞬喜んだがすぐに落胆の気持ちが湧いて来て、モラに言った：「そうだととしても、高官の家には猛犬がいると聞く。私が第 3 の別荘に行くのは無理だ」



「崑崙奴」挿絵 百度百科より

モラはそれを聞いて、笑いながら言った：「お任せください。当日の夜、崔様は黒い服だけを用意してください。虎のように獠猛な犬がいるそうですが、ご安心ください。うまく処理いたします」

崔生はモラの話信じて黒い服を用意した。15日の夜になると、モラは崔生を背負いながら周りの建物の屋根から屋根へと飛び移り、間もなく高官の第3の別荘についた。崔生は犬のことを警戒したが、その犬はすでに死んでいた。

建物を見ると、唯一まだ灯の点いた部屋があり、それが彼女の部屋だった。

モラは部屋の外で待機し、崔生だけが部屋に入ると、彼女はうれし涙を流しながら言った：

「さすが崔様です。聡明な崔様なら私がお示した謎を解いてくださるだろうと思っていました。しかし別荘には猛犬がいるし、衛兵もいます。崔様はどのようにしてここまで来られたのですか？」

崔生は正直にモラがああ謎を解き、ここまで連れて来てくれたのだと話したので、彼女はぜひモラに会わせて欲しいと言った。

モラに会うと、彼女は深々と頭を下げて礼を言い、崔生に向かって一つの願いを口にした：

「崔様、実は私、普通の暮らしをしていたのに、ある日突然あの高官にここに連れてこられて、こんな生活をしています。全く好きではない人の傍にいるのは、一刻も耐えられません。崔様はモラのように素晴らしいしもべをお持ちです。私をこの境遇から救い出してくださいませんか？」

崔生はその話を聞くと、すっかり考え込んで、黙り込んでしまった。それを見てモラは：

「このお方がそのようなご希望なのでしたら、出来ない話ではないでしょう」と崔生を促した。

彼女は大喜びで、身の回りの金目のものを纏めて、脱出の用意をした。モラは崔生と彼女の二人を背負い、来た時と同じようにして高官の別荘から脱出し、

崔生の家に戻った。

翌日、高官はあの侍女がいなくなり、犬も死んでいるのを見て、使用人たちに命令した：「我が家の警備を破り、犬を殺して、誰にも気づかれずに女を連れだせるとは、きっと有名な俠士だろう。騒ぎ立てると今度は私が殺されるかもしれないから、この件は一切外に漏らさないように」

その侍女は崔生の家で無事に3年も隠れていたが、ある日外に遊びに出た時に見つられ、高官に通報された。崔生は高官に呼ばれて詰問されると全てを話してしまった。

「君を誘惑する女も女だが、もう3年過ぎたことだし、あれは君にくれてやろう。しかしモラという者は生かしてはおけない」

高官はそういいながら部下を連れて崔生の家を包囲した。

しかしモラは何の武器も持たずに数十人の包囲から脱出し、姿を消してしまった。高官は報復を恐れて、しばらくは夜もおちおち眠れなかった。

そして10年後、崔生の家族が遠く離れたところでモラと出会ったが、モラは10年の歳月を感じさせないようで、全く変わっていなかった。

~~~~~

「崑崙奴」の物語はこれでおしまいです。如何でしたか？ 物語の初めでは、崔生が素晴らしく優秀であると言いましたが、実は臆病者で、高官の尋問になんの抵抗もなく、恩人であるモラを売ってしまいました。

実は、「唐伝奇」の意義はここににあります。文化的に成熟し、経済的に発展した唐代ですが、役人たちの腐敗や横暴が目立ち始め、人々は弱い者を助ける俠士や勇敢に自分の愛を貫く女性を理想像として、「唐伝奇」の中に求めたのです。

「崑崙奴伝」は演劇や小説、詩歌、テレビ番組の題材として、今でも広く取り上げられ、現代にまで生き続けているのです。



「崑崙奴伝」 国学網より

滞在が4箇月に及んだ2016年には、現地でスマホを入手する破目になった。ガラケーを持参して日本からのショートメールを受け取れば充分と考えていたのだが、中国では仕事上の連絡も個人の携帯電話に掛け合うので、勧めに従って定額式SIMの入った4Gスマホを1000元足らずで購入した。WI-FI環境下なら、国際電話を除き、いくら通話してもSIMの残額はそのままである。

という訳で中国製スマホを持ち歩き、電話連絡を受けたり、随時の写真撮影に使用したが、皆に倣って「哔哩哔哩」というアプリも入れた。

現在は「ユーチューブ」や「tik-tok」が主流であろうが、当時は専ら「哔哩哔哩」を利用して、商店や露店の店員たちは時間に構わず、動画やテレビ番組、映画を視聴し、その合間に客の相手や作業をしているような感じだった。下手をすると、勤務中の事務員までが見ていたりする。5Gスマホがアツと言う間に普及する土台が此処にあった。

筆者も自室で、パソコンに入れた「哔哩哔哩」で、大河ドラマの「真田丸」、石原さとみの「校閲ガール」や懐かしの「古畑任三郎」などを見ていた。

スマホでの写真撮影に関しては、少し困ったことが起こった。スマホの中に記録された写真データをパソコンに移し、さらにUSBメモリに入れて保存していたのだが、どの段階なのか不明だが、自分が撮った写真データに交じって多数のイラスト画像や撮影した覚えのない写真が紛れ込んでいた。どうしてなったのか筆者には今でも分からない謎である。

■「干潟の野鳥写真コンテスト」のサクラ

10月中旬の土曜日のことだったが、「野鳥写真コンテスト」の表彰式にサクラとして参加する機会があった。干潟近くの広場に設営された会場には参加者の椅子が並べられ、演壇や来賓席が作られ、飾りのついた提灯が下げられていた。正面左側には、荷台に大型スクリーンを乗せた車両が横付けにされ、テレビカメラの画像がそこに大写しになる仕掛けになっていた。こうした催しの会場を手際よく豪華に設営するお手並みにはいつも感心してしまう。会場の横



「第5回野鳥写真コンテスト」表彰式（2016年10月撮影）

には、入賞作品を含む、たくさんの応募作品がA3の大きさのパネルになって展示されていた。表彰式開始前には用意された座席は埋まり、その後ろに多くの見物客が立っていた。（上の写真参照）

地方政府関係者たちのお定まりの長い挨拶の後で、コンテストの入賞者たちに表彰状と賞品の授与が行われた。

帰りに、湿地の外れの辺りから、渤海を挟んで聳える断崖の上に、高さのある建物が見えた。それは、中国式の多層の塔のようではなく、灯台のような形に見えた。方角からは「鸽子窝公園」と思われた。

その正体を確かめようと、早速、次の週に、15番の路線バスに乗って「鸽子窝公園（鸽赤路）」で降りた。「海滨汽车站」からは34番の路線バスに乗っても「鸽子窝公園」で降りられるが、その停留所は「滨海大道」沿いであって、15番バスの停留所まで、交差点を右折して「鸽赤路」を歩かねばならず、それだと200メートルほど余分に歩くことになる。

「わんりい」266号で大川氏も書かれているように、市内を走る路線バス利用に関して気を付けなければならないことがある。同じ停留所名でも路線が異なると、思わぬ場所で降ろされてしまったり、降りた停留所と同名の停留所が道路の反対側にあるので、帰りに逆方向のバスに乗ろうとしても、そのバスは通らなったり、その停留所には停まらないようになっていたりする。筆者は長春市内で、確認を怠り、トイレを我慢しながら一向に現れない路線バスを待ち

侘びて、辛い思いをしたことがある。

■塔の正体と渤海の眺めでひと休み

15番バスの「鸽子窝公園」停留所は、「秦皇島鸟类博物館」の入り口の手前にあった。博物館はすっきり、モダンな外観の建物である。此の場所にあるからには、干潟にやって来る鳥たちの種類や生態に関する展示が充実しているだろうと思われた。存在が前から分かっていたら、干潟散策と併せて見学できたのに残念！と思ったが“後の祭り”で、そのまま通り過ぎて「鸽子窝公園」の入り口に向かって歩いた。

500メートルほど歩いてようやく着いた入り口の建物は時計台を思わせるバタ臭い感じだった。パスポートで年齢を証明して半額になった入園料金は13元だった。平日なので人出は多くなかった。

園に入ると正面に「鸳鸯(オシドリ)湖」が広がり、岸には木造船が固定され、甲板から湖を眺望するようになっていた。歩道は湖の左奥にある島に繋がり、島内は遊園地になっている。歩道はさらに対岸に延び、お目当ての塔の下に達した。塔の正体はオランダ風車だった。(下の写真参照)

陽気が良い日だったので、此处でひと休みして持



“塔”の正体はこれだった(2016年10月撮影)

参のオニギリを食べ、眼下の渤海と干潟、遠くに海港区のビル群の眺望を楽しんだ。此处までは、中国らしい特徴を持った景色や事物は何にも無く、どこに

でもあるような子ども

■広場に立つ“彼の人”の立像と漢詩

道の左側に「避雨亭」を見る辺りから、景色はダイナミックになってきた。坂道を登ったら、突然、広場に出た。広場には一層の中国式屋根を載せた展望台



広場に立つ“彼の人”像のシルエット(2016年10月撮影)

が階段の上に聳えていた。すぐに登り始めると「鷹角亭」の扁額が見えた。階段を登り切った途端、渤海が視界一面に広がり、思わず「オー」と声を出してしまった。「鷹角岩」という奇岩も眼下に見えた。

階段を降りながら、広場の一角に見えている大きな立像はもしかして“彼の人”か？と思ったが、予備知識が無かったので半信半疑だった。手持ちの秦皇島市の市街図では公園内の詳細は知る由も無かった。像の足元に着き仰ぎ見ると、お馴染みの帽子に、丈の長いコート裾を風になびかせ、両手を後ろに、東の方角を見据えた顔の表情は若々しい(上の写真参照)。

像の台座の側面の刻字は解説文かと思ったが、漢詩らしく、流麗な文字は筆者には判読不能だったので写真に収めた。ただし、予断を持って見ると、作者名は“毛沢東”と読むことが出来そうだった。

この原稿を書くにあたり、写真とネット情報から、刻字の内容は以下の通りであることを確かめた。

『浪淘沙 北戴河』

大雨落幽燕 白波滔天 秦皇島外打鱼船
一片汪洋都不见 知向谁边
往事越千年 魏武挥鞭 东临碣石有遗篇
萧瑟秋风今又是 换了人间
毛泽东

「絶句」や「律詩」とは異なる「5-4-7-7-4」という字数(や平仄など)は、「詞」の「浪淘沙」の形式と分かった。「詞」については266号の植田先生の解説を参照)。荒れ狂う嵐の海(時勢の象徴?)を見ながら、魏の曹操の詩碑がある碣石の地に思いを馳せ、天下に覇を唱えた曹操に自分を重ね、勝利への強い決意を表したのではないだろうか。(続く)

満州走馬灯 (2)

和田 宏

<柳条湖事件⇒満州事変>

1931年9月18日、奉天（現瀋陽）郊外の柳条湖で満鉄線の爆破事件が発生した。張作霖爆殺事件から3年後であった。満州事変の発端となった柳条湖事件である。事件の首謀者は、関東軍高級参謀板垣征四郎大佐と作戦主任参謀石原莞爾中佐である。関東軍は、張作霖の息子・張学良の軍が起こした破壊工作だと吹聴して、半年で満州全土を占領した。中国側ではこの事件から1945年8月15日の終戦までを“15年戦争”と言う。“満州”と言う不穏当な言葉が何度も出て来て申し訳ないが、現在の中国東北部の遼寧・吉林・黒竜江の3省に当たる地域を指す。私としてはあくまで地理上・歴史上の言葉として表記するので、ご勘弁願いたい（笑）。

私は、2012年3月に瀋陽市にある『九・一八歴史博物館』や張学良の旧居を訪れたことがある。柳条湖事件を題材にした『松花江上』と言う抗日革命楽曲の歌がある。当時西安に居た張寒暉が、東北部から逃げて来た人たちの辛さ悲しさを実際に見て、事件は日本鬼子たちの犯行であるという言い分も聞いて、1935年に作詞作曲した。松花江はハルビン市の中心部を流れる大河である。広い川幅、豊かな水量があり、ロシアの大河アムールの支流である。

『松花江上』

我的家在东北松花江上，
那里有森林煤矿，
还有那满山遍野的大豆高粱。
我的家在东北松花江上，
那里有我的同胞， 还有那衰老的爹娘。
九一八，九一八， 从那个悲惨的时候！
九一八，九一八！ 从那个悲惨的时候，
脱离了我的家乡， 抛弃那无尽的宝藏，
流浪！流浪！ 整日价在关内，流浪！
哪年，哪月， 才能够回到我那可爱的故乡？
哪年，哪月， 才能够收回那无尽的宝藏？！
爹娘啊，爹娘啊。
什么时候， 才能欢聚一堂？！
故郷は松花江の畔 豊かな森と炭鉱の町

見渡す限り大豆と高粱の畑
わが故郷は松花江の畔
仲間がいて、年老いた父母のいる故郷
9・18，9・18 悲しみの始まり！
9・18，9・18 みじめさの始まり！
故郷を離れ、豊かな地を追われ
見知らぬ土地をさ迷い歩く！
故郷に戻るのは何時の日になるのだろうか？
再び豊かな地を取り戻すのは何時の日か！
ああ、父よ、母よ、
再びみえるのは何時の日か！

1936年12月12日、張作霖の息子・張学良らが国民党トップの蒋介石を拉致監禁し、国共内戦を止め、父を殺した日本軍との闘いを優先すべきであると、国共合作を迫る西安事件を起こした。張学良は前日に誰かが歌う『松花江上』を聞いて、決意を新たにしていたと言われている。

私は、NHK新潟放送局に勤務していた1988年夏、新潟市と哈尔滨市が友好都市縁組を締結して5周年を記念する訪中団に随行する形で、ハルビン市に1週間滞在し、様々な話題を取材したことがある。ハルビン市は、ロマノフ王朝がらみのロシア人貴族らがロシア革命から大勢逃げて来たので、“白系ロシア人”も住んでおり、“東洋のモスクワ”との異名がある程、建物など街の雰囲気は洋風である。“太陽島”



瀋陽市にある九・一八歴史博物館の石碑前で 2012・3・17

と名付けられた松花江の中州には、ロシア人達の別荘も並ぶ。松花江は、満州語でスングリウラ（松阿里烏喇）と言い、“天の川”と言う意味である。スングリウラと言えば、歌手の加藤登紀子さんが新宿3丁目で経営しているロシア料理店の名前でもある。登紀子さんの父親・加藤幸四郎が満鉄の職員で、彼女は1943年12月27日当時の満州国ハルビン市で生まれている。加藤登紀子さんと1945年3月13日生まれの吉永小百合さんは、都立駒場高校の放送部員だった。私の姉は駒場高校の写真部で大宅映子さんと同期生だった。1965年4月に早稲田大学政経学部に入學した私は、布のバンドで止めた教科書やノートを肩に掛けて登校して来る小百合さんを文学部キャンパスで目撃したことがある。“サユリスト”と言われる男達が彼女のあとに付いてぞろぞろと歩いていたが、当時“毛沢東盲従分子”を自認していた私は、小百合さんには関心が無かった（笑）。

日本は、明治維新以降、富国強兵・殖産興業を旗印に急速に近代化を遂げると共に、西洋列強に浸食されていた中国や東南アジア地区の民族独立運動を支援すると言う“優等生”的な国家であった。ミャンマーの“建国の父”と呼ばれるアウン・サン将軍は日本軍の協力を得て独立を成し遂げた。イギリスのお尋ね者になったインド独立運動の志士ラース・ビハリ・ボースを当時パン屋だった中村屋の経営者・相馬愛蔵・黒光夫妻が匿った。ボースは相馬夫妻の娘・俊子と1918年結婚し、その後日本に帰化して名字を“防須”と書くようになった。匿ってくれた相馬夫妻にお礼として、防須がカーライスを作って振る舞ったのが縁となり、中村屋は1927年に「純印度式カーライス」を発売するようになった。こうした微笑ましいエピソードがあった半面、日本は徐々に変質して行き、侵略性を帯びた国家、“遅れて来た列強”となって行った。

<幻の王道楽土>

1932年3月に清朝のラストエンペラー溥儀を皇帝にして、“五族協和”、“順天安民”の理想国家『満州国』が建国された。“満州は王道楽土である”“新しく開墾すればその土地は自分のものになる”などと言う軍部のプロパガンダに煽られて、日本国内に居た農民や善意の庶民らが、“夢”や“憧れ”、或いは、一旗揚げてやろうという“野望”を抱いて満洲へ渡って

行った。満洲に移住した人が一番多かったのが長野県民である。長野県の伊那地方には養蚕農家が多く、世界経済恐慌で大きな打撃を受けたため何とか活路を見出そうとして、“満蒙開拓団”や“分村運動”として、まだ見ぬ遠い満洲へ移って行った。長野県民は総じて真面目で勤勉であるが、その反面、お上（かみ）の言うことを鵜呑みにする気質である。背景には1930年代に農民・教員運動の徹底弾圧があり、国策の旗を振る村のリーダーに反対する人がいなくなっていたからである。長野県民は何処で集まっても、♪信濃の国は十州に 境連ぬる国にして 聳ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し・・・と言う自分の故郷を讃える県歌『信濃の国』を歌うことが出来る奇特な人達なのである。わんりいの読者の中に自分の故郷の県歌や市歌を歌える人がどのくらい居るだろうか？私は生誕地である福岡県門司市の市歌を歌えるよ（笑）。

1958年3月、私は目黒区立碑小学校を卒業したが、その時の6年3組の担当教諭が井口萬里子先生であった。井口先生は1925年2月、長野県伊那市高遠町生れ。県立松本女子師範を卒業するやいなや、満州で教師をしていたお兄さんに呼び寄せられて1944年3月、19才で繰り上げ卒業し北部満州に渡り、終戦間近の厳しい状況のもと、1年5か月間、旧満州^{やすおか}泰阜村の小学校で教鞭をとった。しかし、お兄さんは戦死し、ご両親も終戦の混乱の中で生死不詳。先生は20歳で一文無しのひとり身となった。頭を坊主刈りにしてハルビンの街角で靴磨きなどをして糊口を凌いだ。やがて満州から日本に帰国し、都内の幾つかの小学校の教壇に立ち、1982年3月、57歳で退職。晩年は三浦市三崎町にあるキリスト教の高齢者世話ホーム「油壺エデンの園」に入所し、2014年11月、独り寂しく亡くなった。享年89。先生は、体操の時間に満州で習ったと思われる徒手体操を教えてくれた。その時の掛け声が“イチニサンシ、ニイニサンシ、サンニイサンシ、シイニサンシ、・・・”と節を付けた大きな声で音頭を取った。美人で健康そのもの、結婚話が何度もあったにもかかわらず独身を通した。

先生の趣味は私と同じ短歌で、先生の自叙伝とも言える短歌集を戴き、何度か手紙の交換をした。

（続く）

コロナ禍のなか、いろいろな会合が中止になったり、あるいはズームで開催することが多い。ズームということはパソコンを相手にすることである。どうもパソコン相手に会合に参加する気にもならず、人との出会いも本当に少なくなった。

ボケ防止の点からも、人と会って話すことが大事だと言う。確かにそうだが、私などは事務所で若い職員と少しばかり会話する以外は、たまに友人知人との電話での会話が主だ。これも大切なコミュニケーションで、頭脳へのいい刺激になっている。

そうは言っても、年を取ればとるほど新しい人との出会いは生まれてこないのが自然だ。それよりも、長年の友人との別れもだんだんと多くなっていく。つい最近も、小学生時代の親友と大学時代に親しかった同期生が黄泉の国に旅立った。若い時代に胸襟を開いて喫茶店で長く議論したり、話し合ったりした友人もほとんどいなくなってしまった、

長年交流のあった友人知人が減ることは寂しいことである。しかしこれも自然の流れであり、嘆いていてもしかたがない。しかし私は近年、新しい人との出会いが増えているのは嬉しい。それというのも、「星火方正」という方正友好交流の会が年二回発行する会報のお陰である。

ハルピン市郊外にある日本人公墓の存在を多くの人たちに知ってもらい、また旧満洲での日本人の加害と被害の実相を伝えていこう。とりわけ戦争を知らない若い世代、そして旧満洲での日本人の生活などを知らない多くの人たちに、その実情を伝えていきたいと発行しているが、近年なかなか評価が高まっている。3年ほど前に「週刊金曜日」の編集部へ送ったところ、小林和子編集長から「充実したこの会報が会費とカンパでできているなんて本当に驚きです」という手紙を貰った。

そして、この会報を友人に送ってくれとか、あ

るいは知人から紹介されて読み、ぜひ会員になりたい、定期購読したいという電話やメールをもらって新しい出会いが生まれている。

だんだんと友人知人が減るのが普通で自然なことなのに、逆に新しい出会いが生まれてくるなんて考えてもみなかった。これもこちらから発信しているからである。

本を出版するというのも世間に対して発言し、発信する一つの方法である。拙著『エスペラント』を上梓したお陰で、友人知人との絆が深まり、また新しい出会いも生まれている。

ある知人がこんなメールをくれた。拙著の6章で取り上げた伊東三郎のお孫さんからメールをもらったと言うのだ。そのお孫さんは、たまたま書店で拙著を見かけ入手して読んでみたら、「祖父・伊東三郎について、私も知らないことがたくさん書かれていて驚きました」と知人にメールを送ったのだ。

拙著で6人のエスペランティストを取り上げたが、その中でただ一人、私が警咳に接した人が伊東三郎だった。伊東が自分のそのお孫さんと、どの程度接していたのか皆目知らないが、こういうこともあるのだと新鮮な驚きだった。そのお孫さんと会ったわけではないが、こんなエピソードも生まれたのだった。

また8月22日に、読売新聞の読書欄に拙著を取り上げてくれた瀧澤弘和先生（経済学者・中央大学教授）のお陰で旧友との音信が復活した。

読売新聞は世界一の発行部数を誇る新聞である。全国紙であるから地方の方も読んでいる。かつての仕事仲間であるKさんから、「読売新聞で知りました。さっそく読んでみます。元気でご活躍のこと嬉しいです。神戸に来たらぜひお会いしましょう」というショートメールが来た。本当に30年ぶりの音信である。

こういう「再会」？ も嬉しいものだ。

大連の西南端、黄金山と老虎尾の間に、蟹のはさみのような形をした港があります。北は白玉山に寄り添い、港口は南の大海に向かって開かれています。海から遥かに港を望むと、東側の黄金山は雄獅子が海中で腹ばいになっているように見え、西側には老鉄山が迫り、港全体は雄獅子が大きく口を開けているようです。西の太い、俗に“虎のしっぽ”と呼ばれる老虎尾は広大な防波堤のように、海から寄せる大波を遮り、港を始終穏やかに保っています。港の出口は狭く、“一夫関に当たるや、万夫も開くなし”の光景そのまま、これがすなわち国内外に名高い旅順港です。今は、中国海軍の重要な軍港の一つとなっており、勿論近くでの写真撮影は禁止されています。港が望めるのは近くの高さ 130 メートルの白玉山^{注)}の頂上展望台であり、市街地も含めて見渡せるのは、あの有名な二〇三高地からです。

旅順港に関しては、このあたりの人々の間に言い伝えられる次のような物語があります。

注) 白玉山については、日露戦争時の逸話があり、「みんなの広場」に紹介文を載せましたのでご覧ください



旅順港の周りに高い山はなく、ほとんど平らで、平地の前は限りない海原が広がっています。海辺の漁村に、幼くして両親をなくした若者が年中漁をして暮らしており、村人たちは彼を漁兄（漁師の兄さん）と呼んでいました。

その日も彼は漁をして帰り、いつものように魚を籠に入れて、近くの村へ売りに出ました。家を出て間もなく、突然前の籠からどぶ貝が一個転げ出しました。漁兄は荷を置いてどぶ貝を拾い、籠に戻して道を急ぎました。しかし数歩も行かぬうちに、またこのどぶ貝が転げ落ち、地上ではねたのです。彼はおかしいと思って落ちた貝を拾い上げ、手のひらに載せてよく見ました。するとこの

金色のどぶ貝は、口を開けて何かもの言いたげに見えました。声は出せないようですが、表情はとても悲しそうです。漁兄は哀れに思い、海に返そうと担いだ荷を下ろして両手でどぶ貝を抱え、海辺に来て注意深く水に放しました。どぶ貝は嬉しそうに水に身を沈めて見えなくなりました。

やがて中秋節の頃になりました。漁の最盛期です。漁兄は船に乗って遠海の漁区に行きました。ここは風もなく、波も静かで、魚やエビが群れを成し、瞬く間に船倉は活きのいい魚やエビでいっぱいになりました。

帰ろうとしていると、突然大風が起きました。小山のような波頭が真っ向から船を襲い、小さい船は一気に転覆させられて、船底は上を向き、人、魚もろとも海中に放り出されてしまいました。小さいころから泳ぎの心得があった漁兄ですが、暴風と大波にもまれて、心身ともに疲れ果て、しこたま海水を飲んで、ふらふらと海底に引き入れられて行きました。と同時に彼は何かに乗せられているように感じ、うっとり波の行くままに漂っていました。

どのくらい経ったのでしょうか。漁兄はやっと気が付き、目を見開いてみると、あたりはすでに暗く、自分は家のオンドルで横になっていました。そばには美しい娘が立ち、手にスプーンを持って、



旅順港と「虎の尻尾」（百度百科より）

熱いおかゆを彼に食べさせようとしています。漁兄はおかゆを食べて力がつくと、ゆっくりと起き上がり、

「貴女、お住まいはどちら？ お名前は？ 見知らぬ方がどうしてこんなに親切にしてくださるのですか？」

と、訊きました。

娘は気後れすることなく、

「私は他の村の者で海女ハイニユイと申します。ここを通りかかると、貴方が気を失って漂っているのが見え、私は駆けつけて岸に引き上げましたが、このあたりに住んでいらっしゃるとお聞きして、負ぶって家まで帰り、おかゆを作って差し上げたのです。貴方は独り身。身内の方はいらっしゃらないと聞き、たいそう気の毒に思ったのです。今日は遅くなりました。もう帰らないと…。明日またまいります」

言い終わると彼女は姿を消してしまいました。

言った通り彼女は翌日も早く来て、漁兄のために美味しい食事を作ってくれました。でもどう勧めても海女は一口も食べようとしません。漁兄は申し訳なく思う一方、なんていい娘だろう。こんな美しく、善良な嫁がそばにいてくれたらどんなにいいだろうと思っていました。こうして数日、漁兄は胸の内を海女に打ち明けられないまま過ごしました。

この日の夕方、彼女が帰ろうとすると、漁兄はオンドルから飛び降り、部屋の戸に立ちはだかつて海女の行くてを遮りました。顔を赤らめて、

「貴女は私に本当によくしてくれた。貴女のおかげで私の体はすっかり回復しました。また海で漁ができます。私の胸の中にはまだ言いたいことがあるのですが、聞いてくれますか？」

と訊きました。海女は悪びれず、

「私たちのお付き合いは短くはありません。兄妹のように何でも話し合いましょう。恥ずかしいなんて思わないで」

「私は貴女と結婚して一生生活を共にし、深い愛情に包まれて過ごしたいのです。そう思いません

か？」

海女は下を向いてしばらく考えていましたが、深い情熱を込めて

「私は貴方にお会いした日から、とてもあなたが好きになりました。でも私は罪を犯した女なのです。今後何かが起こり、貴方まで巻き添えにすることを恐れています。何度かこれを貴方にお話ししたいと思いながら、話すことができませんでした」

「どうしてあなたに罪があるのですか？ 何の罪があるのでしょうか？ 私に聞かせてくれませんか」

と漁兄は立て続けに訊きました。

「私があなたに代わって罪を償う方法を考えましょう」

しかし海女は、

「いけません。私の罪を貴方が引き受けるなんて！ 私たちはやはりそれぞれ別れた方がいいのです」

というばかりです。

漁兄は断固として言いました。

「巻き添えは恐れない。我々二人が一緒にいられれば、死さえも怖くない！」

海女は、漁兄の彼女に対する深い情愛を知り、感動の涙にむせび、漁兄の求めに応じてこの夜二人は結婚しました。それから漁兄は海で魚を取り、海女は家で家事を切り盛りし、夫婦二人は相思相愛、楽しい日々を過ごしていました。ある朝、漁兄が食事を終え、漁具を整えて海に出ようとしていると、黒雲が南から流れてきて見る間に吹き荒れ、バケツをひっくり返したような大雨になりました。海は荒れて咆哮しながら小さい漁村に真っ向から襲いかかります。これでは漁に出られない。漁兄はひとまず家に帰りました。家に入ると、妻がオンドルのふちに座って泣いています。

「どうしたの？」

と、訊く漁兄に、妻は悲しそうに言いました。

「漁兄、私たちは別れなくてはなりません」

漁兄が驚いて訊きます。

「何があったの？」

(続く)

17 ページの旅順港のお話に出てくる白玉山に関して、大連で2年間お仕事をされ、旅順港に詳しい寺西さんから、補足の説明を頂きました。

■白玉山について 寺西 俊英

旅順港を一望に見渡せる位置にあるこの山は、海拔が約130メートルの小さな丘のような山ですが周りに遮る山がなく、素晴らしい眺望です。白玉山と命名したのは、清代末期の有名な政治家の李鴻章(1823年～1901年)でした。彼は日清戦争の講和条約である下関条約に清側の全権大使として調印した人物です。白玉山は、以前は「西官山」と呼ばれていました。山頂には、高さ約67メートルの慰霊塔が立っています。日露戦争で亡くなった約2万人の将兵の遺骨が納めてありました。この塔は、乃木希典と東郷平八郎の発案で建設されたもので「表忠塔」と命名されました。形も慰霊の意を表すためロウソクを模したと言われていています。中華人民共和国建国後、白玉山塔と名が改められました。なお、この塔は、乃木の故郷の山口県から運ばれた花崗岩で造られています。

~~~~~

#### ■**饅頭**(ビャンビャン)麺が食べられますよ

少し古い話ですが、2020年4月号から7月号までのわんりいで、橋詰滋さんが中原旅行記を書いてくださいました。そこで橋詰さんは西安名物のビャンビャン麺と肉夾饅頭(中国式ハンバーガー)を召し上がったお話を紹介しておられます。

ビャンビャン麺と言う難しい字を初めて知り、ビックリしましたが、後にテレビでもその字が話題になっていて2度ビックリでした。

そんなビャンビャン麺と肉夾饅頭が今、飯田橋の日中友好会館内レストランで食べられます。会館内の展示場で、11月7日まで「陝西皮影の世界」と言う展示会が開催されていて、期間中は、会場の向かいにあるレストランで、ビャンビャン麺と肉夾饅頭が食べられるのです。

実は、この展示会、9月中旬から始まり、「皮影

劇(牛やロバの皮をなめして彫刻や色彩を施した人形を使った影絵劇)」の公演や揚琴の演奏会があるのですが既に予約がいっぱいで、ご案内ができません。ご案内できるのは、影絵劇に使用する人形の展示会とレストランでのお食事だけです。

ビャンビャン麺も肉夾饅頭も、名前はよく聞きますが、実際に食べる機会はあまりありません。因みに、このレストランも提供は展示会の期間中だけだそうです。もしお時間があれば、革製影絵人形の展示を見て、向かいのレストランでお食事をして、陝西省の文化を感じてみてください。

展示会は11月7日(日)まで、10時～17時(金曜日は20時) コロナ感染拡大の状況により変更の可能性あり 休館日は月曜、問い合わせは日中友好会館：03-3815-5085

レストランは会場向かいの「**饅頭**」11時～21時(不定休)



#### ■2021年の夢広場とまちカフェ

昨年は新型コロナ蔓延の影響で中止になった夢広場とまちカフェが今年は、規模を小さくして開催されます。日程は下記の通りです。

##### ▲夢広場 11月3日(水・祝)

場所：町田ポッポ広場

今年は物品の販売のみを行います。わんりいも、モンの小物販売で参加します。

##### ▲まちカフェ 11月27日(土)

場所：町田ポッポ広場

詳細は11月号でご案内します。

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

今月もまた松尾芭蕉の一句です。

秋深き 隣は何をする人ぞ

qiū jiàn shēn  
秋 漸 深

yù zhī lín rén yán  
欲 知 邻 人 顔

